

## 第4章 親子関係における絆の研究 —絆認知と親子関係満足および自尊心との関連性—

戸 口 愛 泰  
高 木 修

### はじめに

複雑化する現代の人間関係を理解することは容易でない。特に昨今では、親の子殺し、子の親殺しといった本来では支えあうべき身近な人たちの間でさえ凶悪事件が発生しており、その数は増加の一途を辿っている（尾木、2007）。これらの事件の根底には、その原因の一つとして、緊密な人間関係の欠損、あるいは、過剰に親密な関係の存在が考えられる。高木・戸口（2007、2006）は、この問題を対人間に存在する「絆関係の光と影」と位置づけて、社会心理学の立場から研究を行ってきた。

本研究では、これらの研究の一環として、個人や社会の安寧に資するだけでなく、逆に、それを抑制するという両面価値的な存在である「絆」関係を、自己に関する全般的な感情、評価、ないしは態度として捉えられている「自尊心」（伊藤、1994）との関連性という視点から検討することで、対人関係の一樣相である「絆」の多面的特性について理解を深めることを目的とする。

絆とは、「断つにしのびない恩愛」や「離れがたい情実」と捉えられており（広辞苑、第3版）、肯定・否定に関わらず、他者と絆を結ぶことが当該の人間関係のみならず社会全体の在り方に多大なる影響を与えることが推察される。高木・戸口（2007、2006）らの一連の研究から、①母子間・父子間には確固とし

た絆が存在し、②その絆には、絆があると安心だといった心理的な効用、自然で当たり前なつながりであるとの認識、反面、すぐ切れる不安定な存在との認識、加えて、否定的な絆の側面への拒絶などの要素が含まれ、③母子間・父子間の関係満足度を規定すること、などが確認されている。もう一方の自尊心 (Self-Esteem) は、一般的に自己概念に包含される概念として長年理解されてきており、人の適応性や精神的健康と関係する重要な概念として研究されてきた (長谷川、1999)。

以上のような研究知見に基づけば、一般に自己を肯定的に把握することと自尊心が高いことは同義であることから、絆と自尊心との間に有意な関連性が認められれば、他者と緊密に繋がることと自らを肯定的に受け入れ、評価することとが相互規定関係にあると考えることができるのではないだろうか。

## 目 的

本研究は、20代から30代の青年が自分と母親の間および自分と父親の間の絆関係それぞれをどのように評価しているのか、また、その評価が自分たちの親子関係の満足とどのように関係するのか、さらには、それらの評価や関係に彼らが抱く自尊心はどのような影響を与えているのだろうか、という疑問に何らかの解答を得ることを目的としている。

## 方 法

### 調査協力者

調査会社のモニター登録者の中からランダムにサンプルした全国の20代から30代の若者1,000名 (20代男性250名、20代女性250名、30代男性250名、30代女性250名) を対象にWeb調査を実施した。なお、調査協力者の平均年齢 (標準偏差) は29.21歳 ( $SD=5.26$ ) であった。

### 質問紙の構成

①親子間の絆尺度：母子間および父子間の絆に対する態度を測定すべく、高木・戸口（2006）で作成された48項目から成る尺度を使用した。それぞれの項目内容が絆関係に関する自分の考えにどの程度該当するかを、「とてもそうである（6）」から「全くそうでない（1）」までの6件法で回答を求めた。

②自尊心尺度（山本・松井・山成、1982）：自尊心を測定する10項目の内容が自分自身の考えにどの程度該当するかを「あてはまる（5）」から「あてはまらない（1）」までの5件法で回答を求めた。

③親子関係満足度尺度：自分の母子関係および父子関係について子どもがどの程度高く評価しているか（満足しているか）を測るために、5項目の内容（私は○○との関係に満足している、○○は私のことを思ってくれる、○○は私を理解してくれる、○○との関係は大切である、私と○○はうまくいっている）が自分たちの関係にどの程度該当するかを「とてもそうである（6）」から「全くそうでない（1）」までの6件法で回答を求めた。

## 結 果

### 尺度の構造解明

①絆尺度の評定データに基づき因子分析（主因子法、Promax回転）を母子間と父子間別に行った結果、母子間、父子間ともに同様の4因子構造が抽出された。絆の対象（父母）によって高く負荷する項目に若干の差異（項目内容と項目数）が存在するため、それぞれの因子構造に基づく得点を分析データとした。なお、母子間と父子間の構造では、同じ因子名を付与した。

第1因子は、絆で結ばれると安心であり、絆は心の支えであるといった絆が存在することによる心理・情緒的なメリットを示す12～14項目からなる絆の「心理的効用」因子である。第2因子は、絆にはお互いの理解や信用、愛情が必要であるといった絆で結ばれるための条件を示す7項目からなる絆の「必要条件」

因子である。第3因子は、絆は目に見えない、自然にできるといった絆自身の特性を示す3項目からなる「自然発生性」因子である。第4因子は、絆を持つことに対するわずらわしさ、憎しみ、損得などの絆の否定的側面を示す5項目からなる「否定的・不安定性」因子である。これらの因子は、戸口・高木（2007）のそれと一致しており、構造の安定性が確認された。

②自尊心尺度の評定データに基づき因子分析（主因子法、Promax回転）を行った結果、1項目（もっと自分自身を尊敬できるようになりたい）を除いた全項目から成る1因子構造が最適と判断された。この1因子構造は、谷（2001）、佐久間・無籐（2003）、川崎・小玉（2007）らの構造と一致しており、内的整合性の観点からも今回除外された項目は異質であると考えられる。自尊心尺度における回答傾向や因子構造の詳細は、Table 1 - 3、Figure 1 を参照さ

Table 1 自尊心尺度の回答分布表

		集計 母数	あてはま らない	ややあては まらない	どちらとも いえない	ややあては まる	あてはまる	無回答
少なくとも人並みには、価値のある人間である。	%	100.0	5.0	7.4	30.6	37.7	19.3	0.0
	度数	1000	50	74	306	377	193	0
いろいろな良い素質を持っている。	%	100.0	3.2	8.8	32.0	39.5	16.5	0.0
	度数	1000	32	88	320	395	165	0
敗北者だと思ふことがよくある。	%	100.0	11.8	17.5	31.0	29.1	10.6	0.0
	度数	1000	118	175	310	291	106	0
物事を人並みには、うまくやれる。	%	100.0	3.4	9.7	26.3	44.7	15.9	0.0
	度数	1000	34	97	263	447	159	0
自分には、我慢できるところがあまりない。	%	100.0	10.3	21.7	32.2	27.3	8.5	0.0
	度数	1000	103	217	322	273	85	0
自分に対して肯定的である。	%	100.0	7.4	15.9	38.2	26.8	11.7	0.0
	度数	1000	74	159	382	268	117	0
だいたいにおいて、自分に満足している。	%	100.0	12.1	24.2	29.2	26.1	8.4	0.0
	度数	1000	121	242	292	261	84	0
もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	%	100.0	3.6	5.9	22.1	40.4	28.0	0.0
	度数	1000	36	59	221	404	280	0
自分は全くだめな人間だと思ふことがある。	%	100.0	11.1	15.3	26.5	30.0	17.1	0.0
	度数	1000	111	153	265	300	171	0
何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。	%	100.0	16.6	25.0	32.9	16.8	8.7	0.0
	度数	1000	166	250	329	168	87	0

りたい。なお、自尊心尺度においても、因子得点を以後の分析データとした。

③関係満足度尺度の評定データに基づき因子分析（主因子法、Promax回転）を行った結果、父母ともに1因子構造が確認された。なお、関係満足度尺度においても因子得点を以後の分析データとした。

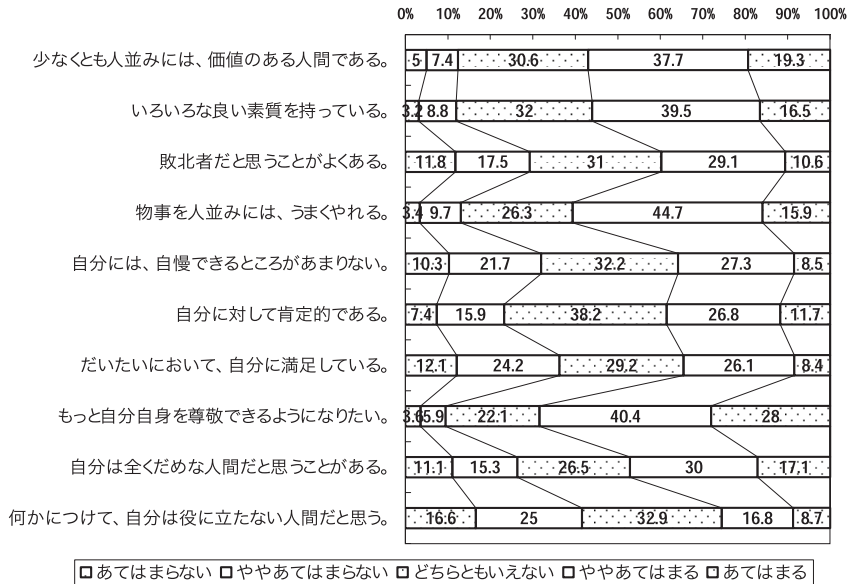


Figure 1 自尊心尺度の回答分布図

Table 2 自尊心尺度の評定平均値と標準偏差および対象者数

項目内容	M	SD	N
少なくとも人並みには、価値のある人間である。	3.59	1.04	1000
いろいろな良い素質を持っている。	3.57	.97	1000
敗北者だと思ふことがよくある。	3.09	1.16	1000
物事を人並みには、うまくやれる。	3.60	.98	1000
自分には、自慢できるところがない。	3.02	1.11	1000
自分に対して肯定的である。	3.20	1.07	1000
だいたいにおいて、自分に満足している。	2.95	1.15	1000
自分は全くだめな人間だと思ふことがある。	3.27	1.23	1000
何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ	2.76	1.17	1000

Table 3 自尊心尺度の因子分析結果

項目内容	因子付加量
何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。	-.79
少なくとも人並みには、価値のある人間である。	.70
いろいろな良い素質を持っている。	.68
自分には、自慢できるところがない。	-.68
自分は全くだめな人間だと思うことがある。	-.65
物事を人並みには、うまくやれる。	.63
だいたいにおいて、自分に満足している。	.62
自分に対して肯定的である。	.60
敗北者だと思うことがよくある。	-.57
付加量の二乗和	3.92
寄与率	43.59

### 男女の自尊心の比較

まず、自尊心に性差があるかどうかを検討するために $t$ 検定を行った。その結果、1%水準の統計的に有意な性差が確認された ( $t(998)=2.71$ ,  $p<.01$ )。変数の得点に因子得点を使用しているために、得点の意味的解釈が困難ではあるが、女性のほうが男性よりも自尊心が有意に高いことが分かった (男性:  $M=-.01$ ,  $SD=.13$ ; 女性:  $M=.01$ ,  $SD=.12$ )。

### 絆意識と自尊心の間の関連性に関する相関分析

絆意識と自尊心の関連性を検討するために、母子関係と父子関係における4つの絆意識と自尊心の間の相関分析を行なった。なお、上記のように自尊心に有意な性差が見られたので、全体 (男女統合)、男性のみ、女性のみで相関分析を別々に行った。その結果、Table 4 に示されているように、母子関係および父子関係の4つの絆意識と自尊心の間には、全体、男子、女子のいずれにおいても、有意な関連性は認められなかった。これらの結果は、自分自身をどの程度積極的に受け入れるかということと、自分の親子関係において絆の関係をどの程度認識するかということとは、直接的には関連しないことを意味している。

Table 4 自尊心尺度と絆因子間の相関係数

絆尺度の下位因子	自尊心との相関係数		
	全員 ( <i>N</i> =1000)	男性 ( <i>N</i> =500)	女性 ( <i>N</i> =500)
父・情緒的効用	.01	-.01	.03
父・先行要因	-.06	-.03	-.05
父・自然発生性	.00	-.06	.04
父・否定的・不安定性	.02	.01	.02
母・情緒的効用	.03	.02	.02
母・先行要因	-.03	-.04	.02
母・否定的・不安定性	-.01	-.03	.01
母・自然発生性	.03	-.02	.06

## 絆意識におよぼす性別と自尊心の効果に関する分散分析

自尊心における有意な性差を踏まえ、さらに、絆意識への性別と自尊心の交互作用効果を予想して、対象ごとの絆意識を従属変数に、性別（男・女、2）×自尊心（高・低、2）を独立変数とする2要因の分散分析を行った。なお、自尊心の高低群の振り分けは、因子得点が負の調査協力者を低群（*N*=505）に、因子得点が正の調査協力者を高群（*N*=495）とした。

その結果、自尊心と性別との有意あるいは有意傾向の交互作用が2つ認められた。1つは、Table 5のように、父親関係において絆は自然発生的であるとの意識における交互作用であり（ $F(1, 981)=4.36, p<.05$ ）、もう1つは、Table 6のように、母親関係においても絆は自然発生的であるとの意識における交互作用である（ $F(1, 981)=2.99, p<.1$ ）。

Table 5 父親との関係における自然発生的絆意識の平均点と標準偏差

	父親における絆の自然発生性					
	自尊心L群			自尊心H群		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>
男性	.01	.88	266	-.19	.97	227
女性	.07	.88	233	.11	.89	259

Table 6 母親との関係における自然発生的絆意識の平均点と標準偏差

	母親における絆の自然発生性					
	自尊心L群			自尊心H群		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>
男性	-.08	.92	266	-.24	.91	227
女性	.13	.85	233	.17	.89	259

これらの交互作用について単純主効果の検討を行ったところ、Figure 2 のように、父親との関係における自然発生的な絆意識は、男性において自尊心の高低群間に有意差 ( $p<.05$ ) が、さらに、自尊心高群においては性別間に有意差 ( $p<.001$ ) が認められた。他方、Figure 3 のように、母親との関係における自然発生的な絆意識は、男性において自尊心の高低群間に有意差 ( $p<.05$ ) が、さらに、自尊心高群において性別間に有意差 ( $p<.001$ ) が、また、自尊心低群においても性別間に有意差 ( $p<.01$ ) が認められた。

自然発生的な絆意識とは、絆が「意図的に作るものではなく自然にできるものである」と考えることであり、Figure 2 や Figure 3 において因子得点の符号が正の場合は、より一層絆が自然発生的であると認識していることを示す。さて、父子関係の場合、自尊心が低い男女および自尊心が高い女性が共に父親との絆関係を自然発生的なものと感じているが、自尊心が高い男性は父親との絆関係を当たり前のものとは考えず、絆は意図的に努力して築くものであると認識しているようである。

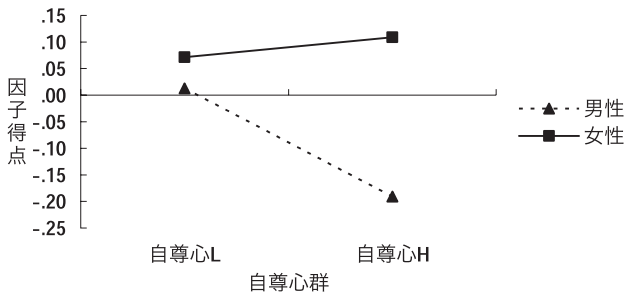


Figure 2 父親との関係における自然発生的絆意識の交互作用グラフ



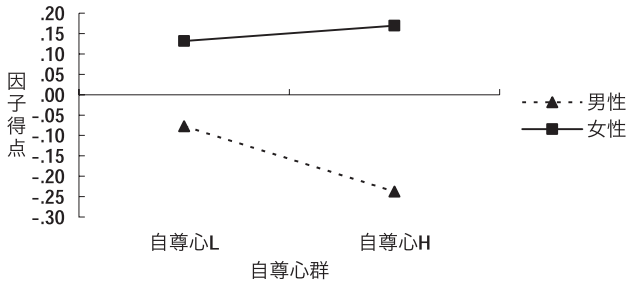


Figure 3 母親との関係における自然発生的絆意識の交互作用グラフ

他方、母子関係の場合、女性は、父子関係の場合と同様に、自尊心の高低にかかわらず、母親との絆関係を自然発生的なものと感じていが、男性は逆に、自尊心の高低にかかわらず、母親との絆関係を自然発生的なものとして認識していない。しかも、自尊心が高い男性ほどその意識が強く、結果として、性差の影響が大きく示されている。

この分析において絆意識に対する自尊心と性別の主効果は有意ではなかった。有意であった交互作用も、絆の自然発生的意識においてのみ認められた程度である。はたして、これらの結果の背景には一体どのような家族間の心理が隠されているのであろうか。

### 自尊心と親子関係満足度の関連性

自尊心と母子関係や父子関係の満足度評定との関連性を検討するために、自尊心得点の正負によって対象者を高群と低群に分け、両群間で関係満足度に有意差があるかどうかを、 $t$ 検定で調べた。その結果、自尊心の高低によって、父親との関係満足度に有意差傾向が、母親との関係満足度には有意差が認められた（父親： $t(998)=1.94$ ,  $p<.1$ ；母親： $t(983)=2.18$ ,  $p<.05$ ）。

Table 7 に示されているように、自尊心の高い群の方が低い群よりも、両親との関係に満足度していないようである。この結果は、自尊心が家族関係への

期待を規定している可能性を示唆している。つまり、自尊心が高いとより一層高いレベルの家族関係を求め、結果的に現状に不満を抱いているのではないだろうか。その一方で、自尊心の低い人たちが親との関係性により一層満足しているのは、自尊心の低さゆえの関係性に対する妥協なのかも知れない。あるいは、己の自信のなさを他者との関係性によって補う効果が作用しているのだろうか。自尊心の持つ不可解さを紐解く上で、性別を検討要因としてさらなる分析を行うとする。

Table 7 自尊心の高低別に見た関係満足度の平均点と標準偏差と対象者数

	自尊心L			自尊心H		
	M	SD	N	M	SD	N
父親との関係満足度	.06	.98	505	-.06	.97	495
母親との関係満足度	.07	.97	499	-.07	.98	486

自尊心と性別の影響による親子関係満足度の比較

自尊心と性別が母子関係や父子関係の満足度におよぼす影響を検討するために、上記の自尊心高低（H・L）群に性別を組み合わせた4群（男自尊L群、男自尊H群、女自尊L群、女自尊H群）を作成し、4群間で関係満足度に差があるかどうかを1要因の分散分析によって検討した。その結果、母親との関係満足度において有意差が確認された（ $F(3,981)=7.87$ ,  $p<.001$ ）。多重比較（Turkey法）の結果、Figure 4のように、自尊心低群女性の母親との関係満足度がもっとも高く、自尊心低群男性（ $p<.01$ ）や自尊心高群男性（ $p<.001$ ）との間に有意差が認められた。また、自尊心高群女性の母親との関係満足度がもっとも低く、自尊心高群女性との間に有意差（ $p<.05$ ）が認められた。

これらの結果は、自尊心の高低と性別が特に母親との関係満足度に顕著な影響を与え、女性においては自尊心の低さが、男性においては自尊心の高さが、母親との関係満足度の十分な予測要因になりうるが、父親との関係満足度においてはならないことが示唆された。

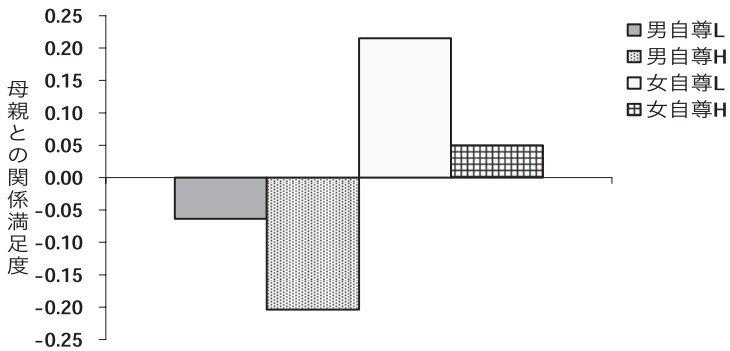


Figure 4 母親との関係満足度のグラフ

上記の分析では、父子間や母子間の関係満足度をそれぞれ対象にしてその影響要因の検討をおこなった。しかし、それぞれの関係を築く場合、間接的なコミュニケーション（例：母から父のことについて、父から母のことについて伝え聞く）によって影響を受けることが多々ある。本調査では、両親について回答できる調査協力者を対象にしているので、「両親との関係」をひとつの単位として、両親との関係満足度を規定する要因の検討が可能である。そこで、自尊心、性別、両親との関係満足度の間にどのような関係性が存在するかを検証するべく、コレスポネンス分析を行った。

この分析では、まず、両親との関係満足度の因子得点の正負に基づき対象者を4群（父母L群、父L母H群、父H母L群、父母H群）に分類し、上記の分析で使用した自尊心と性別の組み合わせの4群（男自尊L群、男自尊H群、女自尊L群、女自尊H群）と共に分析を行った。各群の人数内訳はTable 8の通りである。

分析の結果、まず性別と自尊心の組み合わせによって両親との関係満足度に違いが生じることが明らかとなった（ $\chi^2=21.97$ ,  $p<.01$ ）。さらに、第1次元の説明率は86.2%、第2次元のそれが11.5%であり、累積説明率は97.7%とな

った。コレスポンデンス分析では、それぞれの名義尺度間に内在する関係性を2次元のグラフ上に描くことで、位置関係から類似性を表現することができる。グラフ上にプロットされた各グループの位置関係（Figure 5）では、「自尊心低群の女性」と「父母ともに満足度高群」と「父とは低いが母とは高い満足度群」の間に類似性が認められる。すなわち、自尊心の低い女性は、母親と

Table 8 それぞれの群の人数内訳

父母の関係満足度の4群					
性別と自尊心の4群	父母L	父L母H	父H母L	父母H	合計
男自尊L	99	37	28	105	269
男自尊H	94	31	31	75	231
女自尊L	59	49	24	104	236
女自尊H	81	43	37	103	264
合計	333	160	120	387	1000

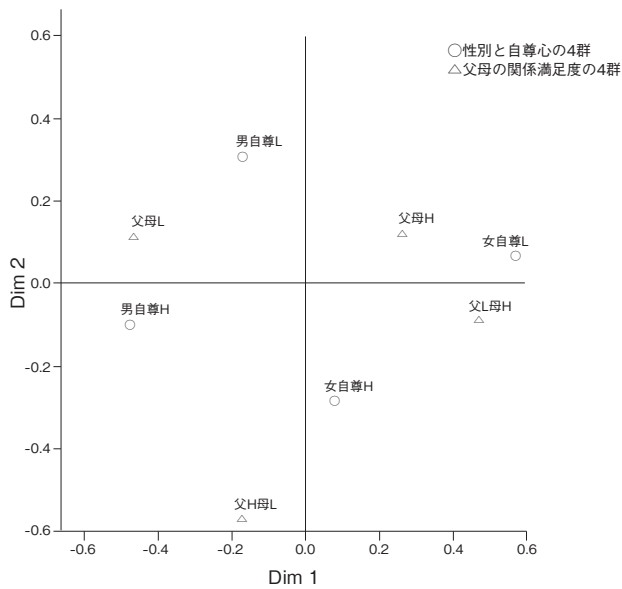


Figure 5 性別・自尊心と関係満足度の位置関係に関する同時布置図

の関係に満足していることを意味している。しかも、その際に父親との関係満足度にはあまり影響を受けないことが明らかとなった。

同時布置図からの読み取りだけでは誤った解釈をしてしまう可能性があることから、行プロファイルのグラフ（Figure 6）と列プロファイルのグラフ（Figure 7）に基づいて検証したところ、自尊心が低い女性では、父母共に関係満足度が高いことと最も強い関連性が示されており、また、父とは低いが母とは高い満足度の場合とも関連性が示されているが（Figure 6）、その強さは、父母ともに満足度が高い場合よりも強い結果となっている（Figure 7）。これらの追加分析からも、女性において自尊心が低いことと母親との関係満足度が高いこととの間の関連が確認された。

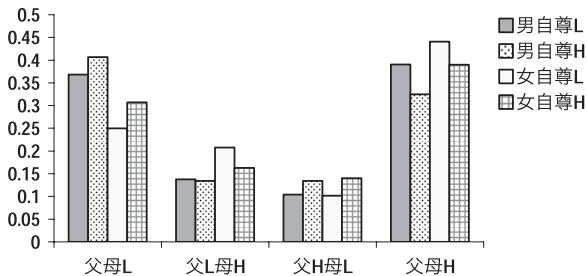


Figure 6 行プロファイルのグラフ

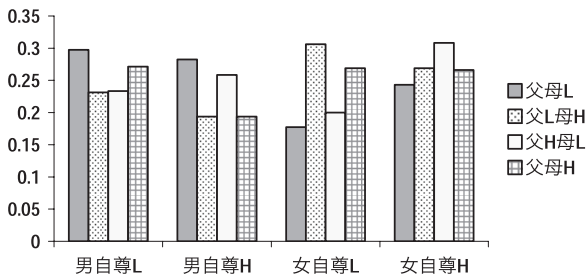


Figure 7 列プロファイルのグラフ

## 考 察

本研究では、親子の間の絆関係についての意識が子の抱く自尊心とどのような関係にあるのかについて検討を行ったが、「性別」の要因が加わることによって始めて絆意識への影響が、ごく一部の絆意識においてのみ出現するといった程度の関係性しか確認されなかった。もともと日本人は自尊心尺度において自尊心をうまく反映しない文化的背景を持つとされている。それは、日本文化が自尊心にて計測される「独立した自己」に価値をおく文化ではないことが1つの理由として考えられる。つまり、Rosenberg (1965) の目指した「自己への尊重や価値」とは、「絆」をはじめとする人との関係性を重要視する文化的価値とは相反する価値観が基盤となった測定内容なのかも知れない。その観点において、絆との関連性が低いことは十分説明できる。しかし、性別が要因として加わることによって自尊心の影響が垣間見られたことは注目に値する。女性の方が男性よりも自尊心が高く、絆を当たり前と認識する本調査からの結果は、絆によって育まれる家族との一体感が自分自身への肯定的な態度と密接に関連しており、しいてはそれらが自己概念として統合的に取り込まれている可能性が考えられる。その一方で、関係満足度においては、自尊心の低い女性と母親との関係満足度に正の関連が見られ、ここから、自尊心が低いからこそ母親との関係性に依存し、強いつながりによる自尊心の補強を行っている女性像が示唆される。あるいは、近年の「友達親子」を代表とする母親との強すぎる関係が、女性を拘束し、自己に対する自信の獲得に思ったより貢献していない結果なのかも知れない。このような脆弱な関係が強すぎる絆の代償であるとするならば、絆の重要性についての検証を継続して行うことの意義があるといえるだろう。

また、本研究では、因子得点を統計量として分析に使用したが、因子得点とは観測変数の得点を因子からの負荷量を基に換算した合成得点であり、しいては各協力者の因子への関わり具合を表すものともいえる。それぞれの項目の重

みづけを加味している分、より情報量が多く、項目得点を単純合算した尺度得点よりも、因子本来の潜在的な概念や項目の持つ意味合いをより反映しているとも考えられる。したがって、本研究の結果は、信頼度の高いものと考えられる。

本調査で対象となった20代から30代の青年は、社会へ旅立ち、個々人の生き方を日々模索しながら生活を営んでいる時期にいる。また、全ての協力者が未婚であり、絆を結ぶ一つの存在としての配偶者がいないことから親子間の絆に対する思い入れは少なくないと考えられる（もちろん、恋人・友人・同僚等との絆は想定可能である）。しかし、日々葛藤しながら生きていく上で自尊心を磨き、誇りを持ち、自分自身を受容していくプロセスの中で、親との絆関係は重要ではあるが、相互に影響しあうものではないようである。それぞれが独立した概念であり、絆を自己の観点から捉えるには他の概念（例：相互協調的自己観、間人主義等）の方が一層有益である可能性を視野に入れつつ、さらなる検討を行う必要がある。「絆」それ自体が我々の自己概念に包含された「個人を個人として把握」するための重要な概念であり、人との関係性の中で、あるいは社会との関係性の中で、人がどのようにつながっているのかによって我々の自己はより強く定義されているのかも知れない。

### 引用文献

- 長谷川博一（1999）自尊心・自己受容の独立性の検討と安定・不安定成分の分離—自尊心・感情尺度の作成—, 東海女子大学紀要, 19, 187-199.
- 伊藤忠弘（1994）自尊心概念及び自尊心尺度の再検討, 東京大学教育学紀要, 34, 207-215.
- 川崎直樹・小玉正博（2007）親和動機のあり方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向, パーソナリティ研究, 15（3）, 301-312.
- 尾木直樹（2007）「カプセル家族」の聞き—続発する家庭内殺人—, 学研新書.
- Rosenberg, M（1965）Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.
- 佐久間路子・無藤隆（2003）大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連, 心理学研究, 51, 33-42.

- 谷冬彦（2001）青年期における同一性の感覚の構造－多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成－，教育心理学研究，49，265-273.
- 高木修・戸口愛泰（2006）「絆」の光と陰 —「絆」のイメージとその構造に基づく「絆」尺度の作成－，関西大学社会学部紀要，37（2），3-28.
- 高木修・戸口愛泰（2007）社会的絆の光と影—人間関係における「絆」とその役割とは—，関西大学経済・政治研究所「セミナー年報2006」・公開講座「第173回（平成18年12月20日）」，209－223.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の構造，教育心理学研究，30，64-68.